

小説吉田学校

——映画文学人生論

原作：戸川猪佐武 (1981年) 「角川文庫」
監督：森谷司郎 (1983年) 脚本：長坂秀佳 森谷司郎
出演：吉田茂 森繁久弥 撮影：木村大作
鳩山一郎 芦田伸介 音楽：川村栄二
三木武吉 若山富三郎 佐藤栄作：竹脇無我
麻生和子 夏目雅子 池田勇人：高橋悦史

日本人は格子なき牢獄にいるようなものだ

私はどちらかといえば、保守的な人間だが、保守本流に所属しているという自覚はないし、誰からも保守本流とはみとめられていない。

そこで、戸川猪佐武『小説吉田学校』を読み、森谷司郎監督の映画を観て、保守本流の研究を試みた。終戦後の昭和二十六年、サンフランシスコ講和条約に調印し、日本の講和独立をはたした吉田茂に見込まれ、頭角をあらわした人物が保守本流で、吉田学校の優等生らしい。

歴代の宰相では、池田勇人、佐藤栄作、田中角栄、福田赳夫、大平正芳、宮沢喜一である。鳩山一郎、石橋湛山、岸信介、三木武夫、鈴木善幸、中曽根康弘は保守本流とはいえない。

吉田茂は労働運動のリーダーを「不逞の輩」とよび、全面講和を主張する南原繁東大総長を「曲学阿世の徒」といったりして、学者、進歩的文化人、学生たちの間で評判が悪かった。

私も和服、白足袋姿、貴族趣味のワンマン宰相が好きにはなれなかったが、映画で大磯の海岸を散歩しながら娘の麻生和子（夏目雅子）に言ったセリフには共感を覚える。

「日本人は格子なき牢獄にいるようなものだ」
「和子、人間とは愚かしいものじゃないか。あの焼け跡がいつになったら元通りになるか。二十年后に出来るかどうか」。

これは吉田茂役の森繁久弥の演技力のせいかも



小説吉田学校

映画文学人生論

しれない。森繁久弥は吉田茂そっくりの声と風貌をしているが、職業は俳優である。船場の道楽息子、駅前旅館の番頭、青べか村の三文文士など、どんな役も巧みに演じわけている。

政治家にも演技力は要求される。吉田茂は外交官出身だけあって、ユーモアのセンスがあり、座談の達人だった。その点では吉田茂と森繁久弥との間には共通の要素もみとめられる。

しかし、政治家と俳優とでは決定的に違うものがある。権力だ。総理大臣には権力という魔物がついている。そのせいか出所進退が難しい。

吉田茂は講和条約締結を花道にして勇退していれば、歴史の評価ではもっと高く名をとどめていただろうが、事実として権力の座に執着し続け、昭和二十九年十二月、野党による不信任案の可決が確実となって、内閣総辞職の追い込まれた。吉田茂に引導を渡したのは小説では池田勇人だが、映画では麻生和子ということになっている。「誰もが成し遂げられなかった講和までの父は、男として、政治家として素晴らしかった。でも今の吉田茂は政権だけの欲望で、総理の椅子にしがみつき、鳩山先生との約束も破って・・・」。

何かと批判は浴びても、吉田茂は日本の平和路線を守った。彼も後継宰相の誰もがテロで暗殺されなかったことが平和国家を証明している。

格子なき牢獄の庭草茂る